

吉蔵と智顛

——五百由旬の解釈をめぐる若杉説への反論——

平井俊榮

一 はじめに——若杉論文批判

『法華経』卷第三化城喩品に「五百由旬の譬⁽¹⁾」というのがある。これは、二乗の涅槃は真の目的ではなく、仏の涅槃こそ真の目的であるが、最初から仏の涅槃を説いたのでは、それがあまりに遠大であるため、志の小さい人々は容易にそれに向って進もうとしない。そこで人々を率いて目的地に至らしめるために、途中で方便として二乗の涅槃を説き、最終的に仏の涅槃に導く、という譬喩である。すなわち、「五百由旬」という長い道のりの検難な悪道を越えて、宝の場所に至ろうとする隊商とそのリーダーを仏陀と弟子たちに譬え、仏の涅槃を宝所に譬え、三百由旬を過ぎた所で、疲労と恐怖のために途中で引返そうとする人々を休息させ安堵させるために、リーダーが方便によって化作した城を二乗の涅槃に譬えたものである。この譬喩は「化城喩品」の最後のところで説

かれ、必ずしも品全体の主題ではないが、「三乘方便・一乘真実」を開顕する『法華経』の趣旨にかなったものとして、「化城喩品」という品名にまでなっている有名なものである。

そこで、古来『法華経』の註釈家たちによって、この「五百由旬」の解釈がさまざまになされているが、その代表的なものが、天台大師智顛（五三八―五九七）や、嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）慈恩大師基（六三三―六八二）等である。智顛は、三百由旬を三界の果報の処に喩え、四百を方便有余土に、五百を実報無碍土に喩えた。⁽²⁾ 吉蔵は、三百由旬を三界に、四百を声聞地、五百を縁覚地に喩え、⁽³⁾ また初の三百を三界の分段生死に、後の二百を二乗の変易生死に喩えた。⁽⁴⁾ 基法師は、分段生死の惑・業・苦を初の三百由旬に、⁽⁵⁾ 変易生死の無明と苦とを後の二百由旬に喩えている。後の二者の解釈には、比較的共通したものが見られるのに対して、智顛の解釈

は独特である。

ところで、最近この智顓と吉蔵における「五百由旬」の解釈をめぐって、両者の説の比較対照を試みた論文が、『印度学仏教学研究』（第二十九巻第二号、通巻第五八号、昭和五十六年三月）誌上に発表されている。身延山短期大学教授・若杉見龍氏による「智顓と吉蔵―五百由旬の解釈をめぐって」という論文がそれである。若杉氏は、智顓の「五百由旬」の解釈は『法華文句』と『摩訶止観』のそれぞれに見られるが、『文句』の方が『止観』に先行し、『止観』の中には『文句』と併読することによってはじめて理解される部分もあるところから、『文句』によって智顓の説を代表せしめ、吉蔵の場合には、「五百由旬」の解釈は『法華玄論』と『法華義疏』に見られるが、この両者の関係は、『義疏』に「玄中具釈」という一文があつて、すでに『玄論』において詳述したことを記しているので、『玄論』が『義疏』に先行し、また、その解釈もはるかに長文にわたって委細を尽しているところから、『玄論』によって吉蔵の解釈を代表せしめ、かくして『法華文句』と『法華玄論』の二書について、「五百由旬」の解釈に関する相当本文の比較対照を試みたのである。その結果、同氏は、智顓と吉蔵の「五百由旬」の解釈をめぐって、大要次のことを知り得たとしている。

(1)『文句』のかなりの部分が『玄論』を参照して記述された

であろうこと。『義疏』に負う所は少ない。

(2)『玄論』が旧釈として紹介する中の一説、「有人言」は、『文句』中に説く智顓自身の説であり、この部分は、『玄論』が一応成立した後『文句』を参照して添加したものであること。『義疏』にこの部分が欠けているのは、『義疏』が成立した時には、まだ『玄論』の当該部分はなかったものと思われ、この点からも『玄論』のいう前述の「有人言」（智顓説）は、後になって現在の箇所に入れたものである。

(3)智顓説の『法華玄義』や『法華文句』が、吉蔵撰の『法華玄論』や『法華義疏』を参照していることは、既に先学により指摘されているが、『玄論』がさらに『文句』を参照していることはあまり知られていない。

(4)吉蔵が智顓の「五百由旬」に対する見解を何時知り得たかという点、会稽時代であれば、最初から『玄論』に述べ、『義疏』に説いたはずであるが、それが見られないから、長安に行った以後、さらには、灌頂が「法華疏」を長安にもたらした仁寿二年（六〇二）以後ということになり、現行の『法華玄論』の成立も吉蔵の晩年ということになる。と、結論しているのである。この結語の(3)に述べるように、智顓の『法華玄義』や『法華文句』が吉蔵の『法華玄論』や『法華義疏』を参照しているという指摘は、古く辻森要修氏

が『法華文句』の国訳の「⁽⁶⁾解題」中に指摘したことであり、すでに佐藤哲英氏の『天台大師の研究』⁽⁷⁾においても改めて首肯されたことである。同書中にいくつかその事例が報告されている。しかし、同書でも、とくに「五百由旬」の解釈について、これを比較検討している訳ではない。また、前述の『文句』の国訳においても、「⁽⁶⁾解題」とは別に本文中の脚注にも「法華玄論に同文あり」とか、「法華玄論参照」のような指摘が数多く見られ、随処に『文句』が『玄論』を参照したことを示唆している。「五百由旬義」についても例外ではない。(しかし、辻森氏の脚注は、五百由旬の相当箇所だけを見ても極めて不十分であり、補足する必要がある⁽⁸⁾)。また、横超慧日氏の『法華義疏』の国訳中にも、吉蔵の『法華玄論』を参照すべき指摘が見られると同時に、「法華文句に引く」或いは「法華文句引用」という形で、『文句』の文と『義疏』の文が一致、若しくは類似している点を指摘している⁽⁹⁾。

しかし、これらの指摘はあくまで断片的なもので、国訳の脚注という制限もあって、若杉論文のように、両者の関係を「五百由旬義」という特別な一項目に限定して、その部分だけをとくに詳しく本文対照するという方法を採用しているのではない。その意味で、筆者にとって本論文は極めて有益であった。にもかかわらず、不本意ながらこうした形で私見を述べざるを得なかった最大の理由は、同論文の結論の意外性で

ある。つまり、前述の結語(1)に見るように、『文句』の「五百由旬」に関する記述の大部分は、ほとんどそのまま『玄論』に負うものであり、著者自身論文の中で「『文句』には何を言おうとしているか全くといってよい程意味のとりにくい箇所もあるが、『玄論』は内容も明瞭であり、『玄論』によって、ようやく『文句』も理解されるのであってみれば、『玄論』が『文句』に先行していると言ってよいであろう」と述べるなど、『玄論』が『文句』に先立って成立し、『文句』に影響を与えていることを容認しながら、他方では、『玄論』の著者吉蔵が『文句』の智顛説を参照したという自論を捨て切れないのである。(これは、著者自身が断っているように、大方の学者の指摘に反してあまり学界に知られることのない、著者の独創的な説であり、本論文の意図するところもこの点にあったと思われる。)そこで、この相反する二つのテーゼを会通しようとしたために、一度『玄論』が成立したあと、さらに『文句』を参照して天台の説をわざわざ「有人言」として「添加したり」、あとで強引に「割り込んで記述されたのである」と推論しなければ説明がつかなくなってしまったのである。その結果、さらに『玄論』の成立を長安における吉蔵の晩年時代に擬するなど、そのほころびは益々大きくなって行くのである。『玄論』は『義疏』に先行することは勿論、吉蔵の著作の中ではその成立が比較的早い時期に属し、数種

類の他の吉蔵著作がその説明を譲っている最たるものである。『大乘玄論』巻第四「二智義」の如きは、明白に「昔、江南に在りて法華玄論を著わし、已に略して二智を明かせり¹⁰⁾」と述べるなど、吉蔵自らが一度ならず言明していることから明らかのように、『法華玄論』は、吉蔵の江南会稽時代の代表的な撰述である。にもかかわらず、若杉論文が前述のような牽強附会としかいいようがない結論を導き出しているのは、本論文の立論の前提が間違っているからである。つまり、『玄論』の「有人説」というのは『文句』における天台の自論と一致しているというの正しいが、それから直ちに、『玄論』がこれを参照し引用したという若杉論文の前提がどこかおかしいからなのである。そうではなくて、『文句』は『玄論』を参照し、『玄論』に負う所多大である、という圧倒的事実から帰納するならば、『玄論』の「有人説」は、『玄論』が『文句』の天台の説を参照し、引用したのではなくて、逆に『文句』が吉蔵の「有人説」を借用し、これを自説として採用したものであると前提すべきなのである。そう仮説すれば若杉論文のような無理なこじつけは無用となり、すべてはつじつまが合うのである。このことは、明らかにいえば『文句』が『玄論』の「有人説」を剽窃したことを認めることになる。しかし、こうした事例は『文句』には他にも数多く見出されるし、¹¹⁾後述するように、「五百由旬」の解

釈をめぐる両者の相当文の対比からも明らかにかがわれることである。逆に、若杉論文の主張するように、『玄論』「有人説」の智顛説との一致が、あくまで、吉蔵の方でこれを参照し依用したというためには、『玄論』と『文句』との相互関係で、つねに『玄論』が『文句』を参照しているというのが大前提となっていなければならない。そのためには、「五百由旬」の解釈に関する「有人説」の一致という、たった一つの事例では明らかに論証不足である。

しかし、筆者が恐れるのは、こうした論証上の手続きの不備よりは、同論文の前述のような結論だけが特別大書されることによって、学界の世論を誤らしめることがないかという懸念である。本論文は、両書の本文対比という、一見して実証的な論述を試みているかのような印象を与えるが、それは、著者自身が断っているように、論述に直接必要な部分だけに限られており、また、両書の論述の前後を入れ換えて提示するなど、「五百由旬」の解釈をめぐる、両書の本文上の相互の出入がどうなっているのか、必ずしもその全体像がつかめるような適切な配慮がなされていない。また、個々の文脈に対する説明注釈もほとんどなされていない。（これは学会誌という性格上、紙数も制限されていたためと思われる、同情は禁じ得ないのであるが。）こうした不備にもかかわらず、前述のような間違った結論だけが強調されているという

感を否認ないのである。そこで、改めて、『文句』と『玄論』における『五百由旬』の解釈に関する両者の全文を、一切省略せず、一字一句比較対照することによって、『文句』と『玄論』の関係を、若杉論文をトレースする形で、考察してみたいと思う。

二、五百由旬義の本文対照

(一) 旧釈の引用批判

法華文句⁽¹²⁾

五百由旬者、

法華玄論⁽¹³⁾

五百由旬義、論曰、仏法雖復

深曠二而大要不出^レ生死涅槃迷悟二躋^一也、諸師盛引^三五百由旬^一、
広證^三諸義、故須^レ評^三其得失^一、此
義若成衆證皆立、斯義若壞衆證
皆謬矣、

①欠

①基師三界結惑為^三三百^一、七地所
斷習氣爲^三四百^一、八地已上所斷無
明爲^三五百^一、

今謂、非^三正別義^一、又非^三三乘
通義^一、

「五百由旬義」の論述は、『文句』『玄論』とも、旧来の諸師の解釈を引用紹介し、その得失を批判することからはじまる。『文句』は、『玄論』の「吉蔵説」を含めて六説をあげ

吉蔵と智顛(平井)

『文句』の構成では五説、『玄論』は五説を紹介している。

これはその『文句』における第一説であって、『玄論』には直接の相当文が見られないものである。『文句』の紹介する他の五説は、吉蔵説を含めてことごとく『玄論』に依ったものである。しかるにこの冒頭の「基師説」だけが見られない。しかし、この第一説の内容は、後に本文対照によって判明するように、『玄論』が「旧釈」の第三番目に紹介する「有人言」(本稿では④に相当する)と酷似したものである。しかもそれは、『文句』の対照箇所^に相当文を欠いており、これが若杉論文の指摘するように、『文句』が最後に自説として挙げたものである。以下本稿において論述するように、『玄論』にあって『文句』にない文脈は多い。しかし、その逆は極めて稀である。とくに第三者の説の紹介や引用経論で、『文句』にあって『玄論』にない文脈はこれしかない。これはいかなる理由によるのか。ここで大胆な推論をするならば、『文句』の撰者は、『玄論』の紹介する旧釈の五説のうち、四説まではそのまま機械的に『玄論』の論述する順序に参照依用したのに対し、第三説の「有人言」だけは、これをアレンジして、『玄論』とは関係がないように冒頭に持って来たのである。その作為の意図は、のちにこの『玄論』のいう「有人言」を自説として利用したかったからである。それは何故かという、この説が、『玄論』の紹介する五説の中

ではとくに具体的な「断惑」に關したものであり、『文句』が「五百由旬」を三つの視点から解釈する際の「約煩惱」にとつて、極めて有用な説であつたからである。しかし、この問題についてはのちに改めて論述したい。今は推論の域を出ない。

②又有家云

④流来生死、變易生死、中間生死、分段生死、但取三種、開爲五百、不取流来、流来是有識之初反源之始、故不説之、

有人難此云

⑧勝鬘云、因五果二、果二者、謂分段變易、因五者、謂五住、語、果既別開、流来与中間、語、因亦、應更広五住、無據不可用、

(欠)

②有人言、生死有四種、二流来

生死、二變易生死、三中間生死、四分段生死、今但明三種生死、以譬五百、不説流来、流来是有識之初、今明反源之始、故不説也、三百謂分段生死、四百是七地中間生死、五百是八地已上變易生死也

評曰、此積五義爲失、一者四

種生死經論無據、勝鬘云、因五果二、果二者一分段二變易、因五者謂五住地、離二生死、別立流来生死及中間生死、應離五住、外別立煩惱、離漏無漏業、別更立業也、

二者法華明五百、而不下増爲六百、減成四百者、經明二種生死、亦不可増減、若二生死遂有増減、則五百義而同然、

大論明、肉身菩薩即分段、法身菩薩謂變易、

又云、阿羅漢捨三界報身、受法性身、故知、生死二耳、

(欠)

三者釈論云、菩薩有二種身、一肉身、二法性身、肉身則分段生死、法身謂變易生死、若二生死外別有三生死、應離二身、外別更有身也、

四者論又云、阿羅漢捨三界肉身、受法性生身、故羅漢唯有二身、則但有二生死、離二之外無別生死也、

五者、若以四百爲七地、則三百爲六地、若爾二乘断惑便与六地齊功、若二乘断惑齊六地者、無有是處、二乘極久唯六十劫或百劫、菩薩至六地時、二十二大僧祇劫、略據一文詳之、則菩薩求仏道而迂廻二乘、望大覺爲直路、而衆經呵斥二乘、便成妄説、又大智論云、二乘去仏道迂廻、不直往菩薩、以經論詳之、不應作此説也、此義至有聲聞無聲聞中、當広論之、

この段は『文句』では旧釈の第二説、『玄論』では第一説で、「五百由旬」を「四種生死」に配当する説である。吉蔵はこ

の説を五義をあげて難じている。その「評曰」という吉蔵の難を、『文句』は「有人此れを難じて云く」といって同文をそのまま引いている。これによって、ここで『文句』のいう「有人」とは吉蔵のことであり、「五百由旬義」に關しても『文句』が『玄論』を引いているのであって、その逆ではないということが証明される。『玄論』の「論難五義」のうち、『文句』は第二と第五を省略している。というよりは、吉蔵の引く『勝鬘經』と『大智度論』の經証のみを引用している。また、相当文を欠く論難の第五については、その一部（側線を施した所）の二句が、次の③—④及び③—①に一致している。

③有人云
三百喻三界、四百喻七地、二国
中間難過、五百喻八地已上、

難者言

④四百喻七地、則應三百喻六地、六地与二乘齊功、
③二乘極久唯六十劫或百劫、菩薩
至六地一時二十二大僧祇、二乘
於二仏道紆廻、不應得齊、
今謂、此非別義、亦非通義、

この段は『文句』の第三説、『玄論』の第二説に當り、『勝

吉蔵と智顛（平井）

③有人云、但有二種生死、如
勝鬘所説、但此中三百喻三界、
四百喻七地、二国中間難可過
度、五百喻八地已上、
評曰、經明七地難可過度、就
菩薩法中、自論難易、云何用此
以化二乘人耶、又若以四百
喻七地、則應三百喻六地、則
二乘還與六地齊功、

鬘經』の「二種生死」⁽¹⁵⁾を「五百由旬」に配当したものである。

④（欠）

④有人言、斷見諦惑爲二百、
斷五下分結爲二百、斷五上
分結爲三百、斷恒沙煩惱爲
四百、斷無明爲五百、
評曰、不然、初果傾三界見諦、
已度三百一半、不応言一百、
又未斷欲界思惟、未度一百、
若過若不及也、又經說三界爲
火宅、二乘出火宅、即是度三
百、不応有此解也、四百爲
恒沙、五百爲無明、還配地位
者同前評也、

この段は『玄論』の旧積第三説で、若杉論文の指摘するよ
うに『文句』の最後に載せる天台の自説である（⑩—⑮参
照）。しかし、前述のように、この「有人説」は『文句』の
第一説「基師説」と類同している。すなわち、この説のいう
「五下分結」とは下分、すなわち欲界に衆生を結びつけてい
る五種の煩惱（欲貪・瞋恚・有身見・戒禁取見・疑）であり、
「五上分結」とは、上分、すなわち上二界（色界・無色界）に
衆生を結縛する五種の煩惱（色貪・無色貪・掉挙・慢・無明（癡）
のことである。したがって、「有人言」の「五下分結を断ず

るを二百となし、五上分結を断ずるを三百となす」という説は、要約すれば「三界の結惑を三百となす」という『文句』の第一説「基説」に同じである。さらに、「有人言」の「恒沙煩惱爲四百」は『文句』の自説では「塵沙爲四百」となっている。つまり、「有人」の「恒沙煩惱」を天台は「塵沙惑」という自家に特有な表現に変えたのである。もし若杉論文のいうように、吉蔵の「有人言」が天台の「自説」を引用し評破しているのであれば、吉蔵はなにもこの「塵沙の惑」という天台に特徴的なこのことばを、わざわざ「恒沙の煩惱」に変える必要はなかったのである。そうではなくて、『文句』がこれをとって「自説」となしたために「恒沙煩惱」が「塵沙（惑）」になったのである。「塵沙（惑）」とは『俱舍』の「不染汚無知」、『唯識』の「所知障」に相当し、『勝鬘經』にいう「二種生死」でいえば、三界外の輪廻に相当する「變易生死」の助縁となるものである。これを『文句』の「基説」では広く「習氣」として、「七地所断習氣爲四百」といったのである。最後の「断無明爲五百」のは字義の上でも三者全同である。この場合の無明とは「五住地惑」の第五の「無明住地」のことである。¹⁶吉蔵の「評曰」の最後に「地位」に配するのは前評同様に不可であるといっているが、これは『文句』の「基説」に対する天台評の「非正別義、又非三乘通義」というに同巧異曲である。

とにかく、この『玄論』の第三説「有人言」と『文句』の「自説」とは全同である。したがって、これだけに限定していえば、若杉論文のいうように、『文句』の天台説を吉蔵は「有人言」として『玄論』に引いたと見ることは可能である。同時に、筆者のいうように、『玄論』の「有人言」を『文句』はあたかも「自説」の如く依用したという主張も、全く対等に成り立つのである。ということになれば、そのいずれが正しいかは、「五百由旬義」に関する両者の相互の依用関係、構成全体から判断さるべきであるし、さらには、前述のように『文句』と『玄論』の全体的関係から総合的に判ずべき問題であろう。筆者の意見は、すでに第一節「若杉論文批判」において示唆した通りである。

⑤ 有人言、三界爲三百、七住及二乘爲四百、七住已上爲五百、

⑤ 有人言、三界爲三百、七住及二乘爲四百、七地已上爲五百、評曰、三界爲三百、則如前判也、後二還以配地過同於前、

この段は『文句』の第四説、『玄論』の第四説である。『玄論』の第二説③に近く、五百を七地以上に配するか八地以上にするかの違いで、吉蔵の「評曰」も簡単である。『文句』は全くそのまま引用している。

⑥ 如大經云、初果八万劫至三菩提心處、如三根人一至此處即

⑥ 有人云、如大經云、須陀洹八万劫到、乃至辟支仏人十千劫到、

領解、

⑧ 五種人至此處、名度五百也、

此取極鈍、故云八万劫到、利人
不必爾、如下世得四果者、
聞法華、皆發心、何必八万劫、

難云、經明度三百由旬、立二
地、豈是度三人也、

① 若五人並發菩提心、名度五百
百一者、

⑤ 乃大經之一意、明五人發心離
於五位、非此中意、

⑥ 此中明、三百是權度、在化城、五
百至、寶所一名、實度、廢化城、
進寶所、

若五人皆度皆進、失化城譬意、

『玄論』の第五説、旧釈五家をあげる最後である。『文句』
では第五説にならなければならぬが、『文句』はこれを先

吉蔵と智顛(平井)

到者至於菩提心處、如三根人
領解、即是發菩提心、

⑧ 以五種人來至菩提心處、故言
廣五百也、此取極鈍根人、故
云八万劫到耳、若利根人不
必須多劫、釈迦一期出世得四
果者、聞法華、皆發心即名至
也、

評曰、是義不然、經明度三百
由旬、立二乘地、豈是度五人
耶、

① 問、五人並發菩提心、名度五
百、如初果、經八万劫、發菩提
心、是超二乘地、名度五百、

⑤ 評曰、此乃是大經明五人發心
離於五位、今非此中意、所以
然者、上來皆明權實之義、今譬
亦明權實、度三百、立化城、此
是權、度五百、至寶所、名爲
實、故廢化城、進寶所、若明
度五人者、皆是進寶所、譬
失立化城、譬意、故此非解也、

の第四説(⑤)の延長とみなし、『涅槃經』によるその経証
の如く解している。しかし、第四説と第五説とは全く異質で
ある。『玄論』と照合すればそれは一目瞭然である。『文句』
の一字一句すべて『玄論』に依っているが、内容的には錯乱
の跡が見られる。例えば、ここで引く『涅槃經』⁽¹⁷⁾の趣旨は、
声聞の四果と辟支仏の五人が、長い時間には菩提心を發して
無上正等覺をそれぞれ得ず、というもので、「有人説」はこ
れを「五人並發菩提心、度五百」と応用したのである。し
かし、これがそのまま『法華經』の「五百由旬譬」には当て
はまらない、というのが吉蔵の「評曰」である。吉蔵は「評
曰」で、「經(法華經)に三百由旬を度って二乘地を立つと
明かす。豈に是れ五人を度するや」といっている。『文句』
では吉蔵の「度五人」が「度三人」になっている。これ
は単純な写誤としても、次の①と⑤は、『玄論』においては
明らかに対立する「有人言」と吉蔵の「評曰」の二文から成
っている。しかるに『文句』ではこれが連続した一文になっ
ている。したがって「若し五人並びに菩提心を發すを五百を
度すと名づくれば、乃ち大經の一意なり」と読まざるを得な
い。しかしそれでは「有人説」を肯定することになり、問題
の所在が不明になってしまう。『玄論』は、この「有人説」
とは異なって、『涅槃經』の意味は、「五人が發心して五人
(それぞれの)位を離れる」という趣旨に解すべきだといっ

て、『法華経』の譬喩に妥当しないことを強調しているのである。内容を考えない機械的な依用による錯乱である。

また、『文句』は、前には「人難レ之云」(2) 或いは、「難者云」(3) のように、引用した有人説に対する批評も、明らかに第三者の評言（この場合はいづれも『玄論』の吉蔵評）であることが判るような引用の仕方をしていた。しかし、この段では、本文対照からも明らかに吉蔵の「評曰」であるものを、あたかも自らこれを評したかの如く「難云」といつているのである。⁽¹⁸⁾

この段は、吉蔵の以上五家の旧釈に対する総評で、これはさすがに『文句』にはない。

(一) 吉蔵の解釈

⑧ 有人云、
三界爲三百、声聞爲四百、緣覺地爲五百、

⑦ 次総評、上来諸釈皆非経意、所_レ以然_レ者、此経三周説_レ権実、有_レ法譬_レ有_レ合譬、此五百由句亦不_レ解_レ合譬意、故引_レ余處経意_レ以_レ釈_レ此文、故皆僻謬也、

⑧ 凡夫三界障、二乘涅槃障、亦是_レ有空二見、

⑨ 華嚴藥樹不_レ生_レ深水火坑、火坑即三界、深水即二乘、

⑩ 三界是二乘之牢獄、二乘是菩薩之牢獄、

⑪ 又是福智二辺、

一者三百爲_レ凡夫地、二百爲_レ二乘地、此二障_レ於_レ仏道、欲_レ求_レ仏道_レ須_レ免_レ斯二障、故釈論云、菩薩退有_レ二事、一貪_レ三界、二樂_レ二乘、今免_レ二退_レ故得_レ入_レ菩薩位_レ進至_レ宝所、又_レ三界名_レ有_レ見地、二乘名_レ空見地、空有_レ二見傷_レ菩薩中道正觀、今欲_レ修_レ菩薩行_レ求_レ於_レ仏道、必_レ離_レ此二地_レ也、⁽¹⁹⁾
又_レ三百以_レ生死_レ爲_レ障、二百以_レ涅槃_レ爲_レ障、地論云、菩薩度_レ五道_レ復淨_レ涅槃、以下_レ五道与_レ涅槃_レ皆是障_レ故、又華嚴云、大藥樹王不_レ生_レ二處、一者深水、二者火坑、火坑深水即是二乘及邪見凡夫、此二不_レ能_レ生_レ菩提心大藥樹王根_レ是故菩薩須_レ離_レ此二地_レ也、⁽²⁰⁾
又_レ三界是二乘牢獄、二乘地是菩薩牢獄、故二乘欲_レ出_レ三界、菩薩欲_レ出_レ二乘地_レ也、⁽²¹⁾
又_レ三界凡夫多修_レ福德_レ而無_レ智慧、二乘之人多有_レ智慧_レ而無_レ福德、以_レ三輪不具_レ無_レ由_レ至_レ仏、故須_レ離_レ之方登_レ大覺_レ也、

不能自行、不能化他、

又行有三種、一者凡夫不能自行、亦不能化他行、二者二乘但能自行、亦不能化他行、則行不

具足、菩薩修自行、故出凡夫地、修化他行、故離二乘地也、

又攝大乘及地持論明障有二種、一惑障、二智障、脫三界煩惱、但離惑障、未離智障、若

出二百便離二障也、

又生死有二種、一段段二變易、

若凡夫受三分段、二乘受變易、

離凡夫故不受三分段、離二乘故不受變易、又生死因緣凡

有二種、一有漏業因四取為緣、

二無漏業因無明為緣、凡夫有

有漏業及四住煩惱、二乘有無漏業、有無明煩惱、今度此五百

則斷此因緣、故生死永盡也、

問、若如後三義、還同旧積耶、

答、旧不下數、二乘為中、二百、豈

同旧耶、

次引證、

問、此積出何處耶、

答、釈論解大品闡持品云、菩薩度四百由旬、則去仏道不

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

大品明三百由旬、合二乘為一百、法華開為五百、

遠、論云、三百喻三界、四百喻二乘地、菩薩度此二地、知必作

仏、

但、大品合二乘為一百、法華開為三百、雖開合不同意無異也、

問、大品已明此譬、者與法華何異耶、

答、大品但明菩薩度凡聖二地、未明二乘為權、猶闕化城之意也、

問、既未辨化城、亦應未明二

室所耶、

答、大品已明顯實相、故辨室所、猶未開權、故不明化城也、

問、大品可用此喻、法華何必同耶、

答、下合化城譬、中仏自作此說也、如經云、仏知是心怯弱下劣、為止息、故說二涅槃、此合度三百由旬譬也、

若衆生住二地、如來爾時即便為說、汝所住地近於仏慧、此合度二百由旬譬也、文既分明無二勞

文既分明無勞惑也、

惑也、而經師都不見此文、橫

引余事、以積故失經旨也、

又不下以三地爲二百、復以何

文合二百耶、

又責旧經師曰、譬說之中明

一化城、今合譬文何故乃明三

地、不応二二相違、

⑧段以降は、「五百由句」の譬に対する吉蔵の解釈である。

『文句』はこれを第六番目（『文句』の構成では第五番目）の「有人説」として引いている。吉蔵は、このような解釈をなす所

以を「義」と「文」の二面から説いている。「一者」以下が第一の「義理」に相当し、「次引證」以下が「文證」である。

『文句』は①—⑩にいたる各文をかなり恣意的に引いている。①の『華嚴經』の「藥樹の喩」は、吉蔵によれば「深水」が三界邪見の凡夫で、「火坑」が二乗である。『文句』ではこれが逆になっている。なお、この經の引用は取意で、

『文句』は吉蔵が取意して引いた文をそのまま依用している。こうした例は多く、これによって『文句』の数多い經証が、『玄論』からの孫引きの場合が多いことが判るのである。

『文句』の吉蔵説の引用は、単に「有人説」の紹介として

みても、あまりに断片的に過ぎて、『玄論』を参照すること

なしには意味が取れない恐れがある。この点は若杉論文の指

摘する通りである。ことに「義」に関する部分でその傾向

が甚だしく、「文証」の部分では、かなり頻繁に依用する傾向がある。なお「引證」のはじめに引く『大智度論』の文は『文句』のこの段の対応箇所には見られないが、次段の⑨—⑩に相当文を見出すことができる。

⑨又明、二乗六義同、十義別、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

所以合爲一化城、

別開三十義、

行因久近六十劫百劫故、根利鈍、

從師獨悟、無悲鹿羊、有相無

相、觀略広、能說得三四果法、不

能說法得煖法、在三世、不

在三世、頓證漸證、多現通、少

説法、声聞不定、

⑨今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

⑩今明開合、皆有其旨、所以合爲一化城、

火宅三車、今爲二百、

三根同爲火宅所燒、
三根求出故三車、

仙道長遠、二乘是惡道故二百須
離、

仙乘非障、但明二百、

何故約凡開三、約聖開二、

此引進之言耳、

所度猶少、未度猶多。

不定、(九)声聞或頓證四果、或復

漸證、緣覺必頓證、如三藏、

(十)緣覺現通多說法少、声聞不定、

以具二十義、故開爲一地、是故

三百譬三界、二百喻一地也、

問、譬喻品何故合三界爲一

宅、開教門爲三乘、今何故開

一宅爲三百、合三乘爲二

百耶、

答、前明下同爲苦火所燒、故

合爲一宅、求出者有三根人不

同、故教門開爲三乘也、

今明仙道長遠、三界及二乘地是

大惡之道、要須度之然後得仙、

是故開一宅爲三界、三乘中但

二乘地是障、仙乘非障、故但

明二百也、

問、何故以凡夫地爲三百、小

乘地爲二百耶、

答、蓋引進之言、明汝所度

已多、汝所住地近於仙慧、唯二

百在耳、當怒力精進、宝所不

遙、以理言之則所度猶少、未度

猶多、二乘發心始入十信、方經

若爾未成了義、

仙道雖長、如萬里行但五百是

難、余者則易、

問、二百是二乘難、三界是凡夫

難、菩薩有難不、菩薩不下以

火宅爲難、不心求車而出、

既求車出、何不爲二百所

障云、

大論六十六云、

險道是世間、一百由旬是欲界、

二百色界、三百色界、四百是二

乘、又倒出數、一百是二乘道、

二百是無色、三百是色界、四百

是欲界、此經明五百由旬即菩

薩道、若過五百即入仙道云

人師及經論異出如前、

耳、爾前極長百劫修行故、所
度猶少也、

問、若所度已多、是引進之言、

則此經未成了義耶、

答、深有旨也、明仙道雖長、

若能度凡夫地及離二乘地

者、後進修行不復爲難、故名

爲近仙、如萬里之行唯五百里

多難、若過此道則前進爲易

也、

この段も引続き吉蔵の自説の展開であるが、とくに二乗の涅槃を化城に喩えることに因んで、声聞、縁覚という二乗の開合、つまり共通性(合)と別異性(開)を論じたものである。この段に関しては、『文句』は簡略化されてはいるが、ほぼ全面的に『玄論』を依用している。とくに同の六義(A)と別の十義(B)は全同である。ただ別義の(九)については『玄論』では「声聞には頓証と漸証の二義があるのに、縁覚は必ず頓証である」というのが趣旨であるが、『文句』はこれを「頓証と漸証」のように割切っている。なお、同じ吉蔵説でも『義疏』では「七同十異」⁽²²⁾に増広されている。この点から推しても『文句』は『義疏』に依ったのではなく、専ら『玄論』を参照したことがうかがわれる。©以下は問答であるが、『文句』は簡に過ぎて『玄論』を参照しないと意味不明なものが多い。例えば、①の意味は、「五百由旬のうち、何故凡夫地を以て三百となし、小乗地を以て二百となすのか」というのが問の意味である。それに対する答は、「すでに(三百という)多くを度し、今いる所は仏慧に近く、ただ二百を残すのみである。努力精進すべきで、宝所も間近であるとなすを引進することばだからである」というのである。それが経の趣旨でもある。しかし、ここで吉蔵はさらに敷衍して、理論的にいえば、凡夫地から二乗地にいたるはむしろ易く、二乗地から仏地にいたる方がより困難であると述べている。

それが次の「所度猶少、未度猶多」の意味である。これを『文句』は全く無造作に、「問」の「答」にしてしまっているのである。したがって、「何故」という「問」に対する「答」として、「引進之言」という意味がよく分っていないのではないかと思われる。『文句』の②については末尾に「云」とあり、明らかに引用文であることが知れるが、取意の文か、『玄論』の対応する箇所⁽²³⁾に相当文はない。③の『大智度論』の引用は、経証として自ら検索したように別出してあるが、前述のように、前項の『玄論』「引証」の冒頭に引かれるもので、『玄論』では極端に取意して引かれているので、別々に引用したかの感を懐かせるが、『大智度論』の箇所は同じであり、『文句』は改めてこの全文を引いたものと思われる。

最後に「人師経論異出如前」と、『文句』に於て極めてなじみ深いことばがでてゐる。これはうっかり素直に読むと、『文句』の撰者がこれまで実に多くの人々の学説や経論を引いて、「五百由旬義」に関していかに縷々論証することが多かったかを信じ込まされてしまうに充分な表現である。しかし、このことばはむしろ常用句であって、他の例においても⁽²⁴⁾自明なように、これは『文句』が、或る主題に関する「有人説」「経証」のすべてを『玄論』から引用しているという、いわば孫引きであることを糊塗し隠蔽するための常套手段な

のである。このことは、以上見てきた両者の本文対照からしても逃れようもない明白な事実である。

三、結語—『文句』の自説について

⑩^④今依此經判之、三界果報處爲三百、有余國處爲四百、實報國處爲五百、下文合譬云知諸生死、生死即是處所明矣、但仏旨難知更須三広解、

⑪^⑤見惑爲二百、五下分爲二百、五上分爲三百、塵沙爲四百、無明爲五百、下文合譬云煩惱險難惡道義相扶也、

⑫^⑥入空觀能過三百、入假觀能過四百、入中觀能過五百、下文合譬云善智險道通塞之相、即雙知因果二種五百義相扶也、

二險難惡道者、(後略)

次論惡道、(後略)

最後の⑩段は、『文句』の自説である。当然のことながら、これに相応する『玄論』の文はない。ここで天台の自説を検討してみると、天台は『五百由旬』を三つの視点から解釈している(①—③)。しかし、最も代表的な説は①説であり、他の②・③の二説は附屬的なものに過ぎないことは、①説の

末尾に「但し、仏旨は知り難し。更に須らく広く解すべし」といって、以下の二説が自由に拡大解釈したものであることを示唆しているからである。そこで、天台説を代表する第一

説であるが、これは、「五百由旬」を自家の教学に説く「四土説」⁽²⁵⁾に配当したものである。すなわち、三百に喩えられる

「三界果報處」とは四土の(1)凡聖同居土であり、四百に喩えられる「有余國處」は(2)方便有余土、五百に喩えられる「實報國處」は(3)實報無障礙土に相当する。したがって「五百由旬」を越えていたる「宝所」は四土の(4)常寂光土に喩えられる⁽²⁶⁾

よう。これは、前述のように、吉蔵や慈恩大師基が「宝所」を真の仏の涅槃とする説とは大分異なったものである。『法華經』の文脈や趣旨からすれば後二者の解釈の方が正当であり、『文句』の説は極めて特異である。むしろ經の譬喩の解釈というよりは、「四土説」という自家の教説に「五百由旬」を当てはめた解釈といえよう。今、その当否は別として、横

超慧日博士は、この『文句』の自説も、結局は吉蔵の「三界を三百となし、声聞地を四百となし、緣覺地を五百となす」説を基本とし、これに準拠したものであることを示唆している⁽²⁷⁾。第二説は、すでに述べたように『玄論』の「有人説」と同じで、これを「約煩惱」⁽²⁸⁾の説として引いたものである。第三説は「約觀智」の説である。最も天台らしい解釈といえ

ば、この第三説である。しかし、『摩訶止觀』にも「次約觀

智者、空觀智知ニ三百、假觀智知ニ四百、中觀智知ニ五百」と、わずか二十三字で説明されているにすぎない。⁽²⁹⁾④の「四土説」と同様、自家の教義に機械的に配当したもので、『文句』自身が拡大解釈であるといっているように、厳密にいえば、これが『法華経』の「五百由旬」の解釈として妥当なものとはとうていいえない。

以上、若杉論文を批判する形で、「五百由旬」の解釈に関する吉蔵説と智顛説とを逐条的に本文対照した結果、旧来の学説及び引用経論から、それに対する批評も含めて、ことごとく『文句』は吉蔵の『玄論』の所述を、なかば機械的・恣意的に依用参照したことは歴然としている。さらに『文句』独自の説と思われるものも、こうした所述を参照して自家の学説に付会したものである。『文句』は天台にあっては、三大部の一つに数えられ、しかも、その中では、『法華経』という一宗所依の経典を随文解釈しているいわば根本典籍である。こうした『文句』の性格を考えるといかにもお粗末としかいえないもののである。こと「五百由旬」に関して、こうした『文句』と『玄論』の関係を考慮に入れるならば、吉蔵が『玄論』を撰述したあとで、再び『文句』を参照し、その中の一説（しかもそれは天台の代表説ではない）を「有人説」として挿入するなど考えられないことである。第一、そうだとしたならば、吉蔵は、自分の著述からこれだけ大量に、そ

れも誤解だらけの借用を試みている『文句』の文体に全く気が付かず、あるいは気付いてもそれらはすべて不問に付して、唯唯として天台の説を一部紹介したというのであろうか。そんなことはあり得ない。結論は簡単である。『文句』は、吉蔵が『玄論』で紹介した「有人説」を自説の一つとして採用したに過ぎないのである。

一般に『文句』が『玄論』を参照し、依用することが多々あるとしても、この「五百由旬」の解釈に関する部分は、極めて異常である。若杉論文のいう後の「挿入」ということを借りるならば、『文句』における「五百由旬」の解釈全体が後代の挿入であると考えられないであろうか。

註

- (1) 妙法蓮華経卷第三（大正九・二五下―二六上）
- (2) 法華文句卷第七（大正三四・一〇一中）
- (3) 法華玄論卷第八（大正三四・四二八上）
- (4) 法華義疏卷第八（大正三四・五七五中）
- (5) 法華玄賛卷第八（大正三四・七九九中）
- (6) 国訳一切経「経疏部二」「妙法蓮華経文句解題」三一六頁参照。
- (7) 佐藤哲英『天台大師の研究』三五〇―三五四頁参照。
- (8) 前註(6)法華文句国訳の「五百由旬義」の脚註には、三二五頁の註二二に「別開十義、法華玄論八（大正蔵三四・四二八）参照。」と、ただ一箇所指摘が見られるだけである。

(9) 国訳一切経「経疏部三」三八三頁、註一八六、一八七、一八八、一八九等参照。

(10) 大乘玄論卷第四(大正四五・四二上)

(11) 拙稿「吉蔵と智顛―経典註疏をめぐる諸問題」『東洋学術研究』第十号参照。

(12) 法華文句卷第七下(大正三四・一〇〇下―一〇一下)

(13) 法華玄論卷第八(大正三四・四二七上―四二九上)

(14) 四種生死に關しては『勝鬘宝窟』卷中之末(大正三七・四九中)に詳しい。また『法華義疏』卷第八(大正三四・五七五上)にも相当文あり。

(15) 勝鬘經一乘章第五(大正十二・二一九下)参照。なお、本段の「有人説」は法華義疏卷第八(大正三四・五七五上―中)にも同文あり。

(16) なお、この説の四百と五百に關する後段の解釈は、法雲の『法華義記』卷第七とも類似している。すなわち同書に「欲界如二百、色界如二百、無色界如三百、七地所断三界余習如四百、八地已上至金剛心所断無明住地煩惱如五百」(大正三三・六五四中)とあり、この「有人言」や「基説」が、法雲若しくはそれに近い南方成論師の説であったことがうかがわれる。したがって「基師」とは、慧基(四二―四九六)(伝記は梁高僧伝卷第八(大正五〇・三七九上―中)のことであろう。

(17) 涅槃經卷第三十(大正十二・七三七下)参照。

(18) 法華文句の国訳者も、これを智顛自身の批評とみなしている。前掲国訳一切経三二五頁参照。

吉蔵と智顛(平井)

(19) 法華義疏卷第八に「所以作此积者、有義、有文、有義者(中略)言三文證者……」(大正三四・五七五中)とあり参照。

(20) 華嚴經卷第三十五「仏子、此藥王樹、一切諸處、皆悉生長、唯除二處、所謂地獄深坑及水輪中不得生長」(大正九・六二三中)

(21) 註20の原文からも明らかのように、經の「地獄深坑」を「火坑」に、「水輪」を「深水」に変えて吉蔵は引用していることが分る。

(22) 大智度論卷第六十六(大正二五・五二六中)参照。なお大品般若經卷第十三聞持品第四五(大正八・三一五上)を合せて参照。

(23) 法華義疏卷第八に「問、二乘有幾義異、幾義同、答、異義乃多、略明三十一種異(中略)所言同者略明七種(後略)」(大正三四・五六八下―五六九上)とあるを参照。

(24) 法華文句卷第八上(大正三四・一一一上―中)にも、多くの有人説を引用し、「既是諸師異积故録之耳」と結んでいるが、これも「有人説」「引用経論」とも、ほとんどすべて『法華玄論』卷第八(大正三四・四三二上―下)に完全に一致し、明らかに『玄論』からの孫引きであることが知られるなど、その一例である。

(25) 「四土説」(または四種国土・四種淨土)は智顛の『觀無量寿仏経疏』に「四種淨土、謂、凡聖同居土、方便有余土、實報無障礙土、常寂光土也」(大正三七・一八八中)とあるのが一番明瞭である。ただし、智顛の『觀経疏』は、今日の

学界では、慧遠の『観経疏』を模した偽撰とみなされている。（佐藤哲英『天台大師の研究』五六七頁以降参照。）

- (26) 『文句』の「釈化城喻品」は当然、この後文に「宝所」の譬を解釈している。紙数の都合で省いたがこの部分も『玄論』を全面的に依用している。しかも自説の展開にあつては、「五百由旬」の譬に順ずるならば、当然、「宝所」は「常寂光土」に解さなければならぬ。しかし『文句』には「宝所有三義、若用究竟則以三極果爲三宝所、（中略）若分入即以三初發心住爲三宝所」（大正三四・一〇二下）とのみあつて、「常寂光土」の文字はどこにも見当らない。これも甚だ奇怪である。

- (27) 国訳一切経（経疏部三）三八三頁の註（一八九）に「法華文句に引く。文句の説は三界の果報の處を三百となし、有余国の處を四百となし、実報国の處を五百となす。」とあり、横超博士は、これが『文句』に参照されているとみている。

- (28) 『文句』自説の三説がそれぞれ「約生死処所」「約煩惱」「約観智」の視点から述べられたものであることは『摩訶止観』卷第七上（大正四六・八六中―下）にあり、若杉論文に指摘されている。

- (29) 摩訶止観卷第七上（大正四六・八六下）